とある“原石の死神”

赤司楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある“原石の死神”

【Ｎコード】
Ｎ７４３６Ｚ

【作者名】
赤司楓

【あらすじ】
『原石』の中でもかなり異質な力を持つ少年ーーー黒崎一護は、御坂美琴に追いかけ回されたり、上条当麻の不幸に巻き込まれたりと、それほど退屈しない日々を過ごしていた。
だが、彼はしだいに魔術やら科学の抗争に巻き込まれていく。
『ＢＬＥＡＣＨ』　と『とある魔術の禁書目録』の二次創作です。
注意点１、時系列を意図的に変えています。

前から構想だけはあったので、やってみました。

感想などをくれたら、作者のやる気も上がります。。

#1 Railgun&Strawberry（前書き）

やってしまった……。

#1 ―Railgun&Strawberry

『学園都市』。
午前七時〇〇分。
七月一三日。

一人暮らしにしては、少々大き過ぎる部屋に、『ピピピ、ピピピ』、という機械的な音が響き渡った。
音の正体は携帯電話のアラーム音だ。どうやら午前七時丁度に鳴るように設定していたようである。
眠りについていた少年ーーー黒崎一護（くろさきいちご）は、ごそごそと腕を動かし、携帯電話を探す。数秒後、一護は携帯電話を掴み、今まで耳障りだったアラームを消す。自らの眠りを妨げる原因を追い払った一護は、再び睡眠を再開する。

しかし、

『ピピピ、ピピピ』という音がまた流れる。完全には消えていなかったようだ。
今度こそ、黒崎一護は寝るのを完全に諦めた。
携帯電話のアラーム音によって、強制的に眠りから起こされた一護

は、まだ機能しきっていない頭を軽く押さえながら、一言だけ、誰もない部屋で小さく呟いた。

「ーーー眠みィ……」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーー
とある"原石の死神"
超電磁砲篇
#1―Rail gun&Strawberry
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーー

大きな欠伸をしながら、黒崎一護は寝巻きとして愛用していた黒いジャージとTシャツから、学校指定の制服に着替える。彼が通っている高校の指定制服は、今時珍しい学ランである。一護が知っている他の学校の制服は、ブレザーだったりチャック式（？）の制服だったりと、色々ある。だが、その中でこの高校は学ランを選んだ。ここの校長は学ラン愛好家なのだろうか？と、一護は入学式の時、内心密かにそう思っていた。

制服に着替え終わった黒崎一護は、次の作業に取り掛かる。
机の上に置いていた鞄を取り、チャックをあけ、中に教科書とノート、筆箱を入れる。
それを終えたら、今度は自分の朝食の準備に取り掛かる。
『取り掛かる』、と言っても、彼の朝食は＜味噌汁＞と＜納豆＞と＜白米＞だけ。
それらを五分くらいで用意し、一〇分程で平らげた一護は、携帯電話で今の時刻を確認する。

七時二七分。

学校に十分間に合う時間帯だ。
余裕を十分に残して、黒崎一護は鞄を取り、学生寮を後にした。

ーーー

学園都市。
東京西部の未開拓地を切り開いて作られた街。面積は東京都の三分

の一程で、外周は高い壁に覆われている。人工はおよそ二三〇万人。
その八割は学生である。ありとあらゆる科学技術を研究し、学問の最高峰とされるこの街には、もう一つの顔がある。人工的かつ化学的なプロセスで経て組み上げられた、『超能力養成機関』である。
学生を対象に『開発』させるこの能力は各人によって様々な種類に分かれるが、その価値や強さ、応用性などによって、無能力者《レベル０》低能力者《レベル１》異能力者《レベル２》強能力者《レベル３》大能力者《レベル４》超能力者（レベル）と六段階に分類される。

ちなみに、先程出てきたこの物語の主人公である黒崎一護は、無能力者《レベル０》である。
もっと厳密に言えば、“一応”『原石』として書庫（バンク）に登録されている。
“一応”というのは、黒崎一護の能力を『原石』として扱っていいのかが、分からないからである。科学者達も彼の能力を研究したいが、一護自身に断られている為、お預け状態となっている。過去に強行手段をとった科学者も居たが、ぼろぼろになって帰ってきた為、今ではそういう事をする科学者は居なくなったらしい。

さて、その能力分類不明少年が今何をしているのかと言うと、

「待てって言ってんでしょうがァァ！！」

常磐台中学の『超能力者《レベル５》』に追いかけ回されていた。
何故こうなった……、と黒崎一護は素直に思う。
確か今日は七時三〇分頃には寮を出た筈だ。
それが何故八時四三分になっている？
後二分でホームルームが始まってしまうではないか。

ちなみに、美琴が通っている中学の登校時間はもうとっくに過ぎている。その事に美琴は気づいていない。
街中を全力疾走している一護は、後ろを見る。
ここからでは少し遠い為、余りよく見えないが、それでも黒崎一護を追いかけている少女ーーー御坂美琴（みさかみこと）が美少女なのが分かる。
だが、いくら美少女だとしても街中で追いかけ回されるのは、少し……いや、大分嫌だろう。
二人が走るスピードは、学生が走る平均スピードを軽く越えている。
正直、黒崎一護は本気で走っているのだが、美琴はそれに食らいついてきて、どこまでも追いかけている。どうやら美琴は運動神経はかなり良いようだ。

行き交う人々が彼らを凝視するのは、言うまでも無い事だ。
一護はズボンのポケットから携帯電話を取り出し、時刻を確認する。

八時四五分。

無常にも、黒崎一護が通っている高校のホームルームが始まる時間になってしまった。
最後にもう一度、一護は心の中で思う。

何故こうなった……、とーーー。

ーーー

時間は少しさかのぼる

七時四二分。

黒崎一護はのんびりと自分が通う高校に向かっていた。
赤信号に引っ掛かった時、一護は昼飯が無い事を思い出した。面倒臭かったが、昼飯が無いのは嫌だ。一護は無理矢理体をコンビニがある方へ向ける。
コンビニに向かって五分程歩いた時だった。

「やっと見つけたわよ！！」

いきなりだった。
後方から可愛らしい……、いや、元気な少女の声が聞こえた。
一護は首だけ動かして、声のした方を見る。
そこに居たのは、

「またお前か」

御坂美琴という名の女子中学生だった。
一護はため息混じりに呟く。
さて、これでこの少女に絡まれたのは何回目だろうか、と頭の片隅でぼんやりと考えていた。
確か彼の記憶が正しければ六月二〇日が初めて鬼ごっこをした日なので、多分軽く一〇以上絡まれているような……。

「さぁ勝負しなさい！！」

「断る。今日はそんな気分じゃ無ぇんだ」

と、一護は断るが、

「そんな事こっちは知ったこっちゃないのよ！！」

「おい」

さて、どうするか。

出来れば平和的に行きたい所だが、美琴にそんな気はさらさら無いようだ。

こんな目立つ髪の色をしている為か、美琴にはすぐに見つかる。そもそもこの広い学園都市、第七学区でこんなにも高い確率で遭遇するのだろうか？

謎だ。

いくらオレンジ色の髪をしているからと言って、この広い第七学区の中で何回も少年を見つけ出す少女にも、ある意味感心する。

「……ちょっと、聞いてんの？」

「あ？あぁ、聞いてる聞いてる」

適当に返しておく。

（面倒臭いし逃げるか……？）

内心でそう思う。

そしてすぐに行動する。

一護は、勢い良く走り出した。

「あ！！逃げるなー！！」

その後を美琴が追いかける。

学園都市での鬼ごっこがたった今強制的に引き起こされた！！

ーーー

所変わってとある高校。

黒崎一護が鬼に追いかけ回されている中、無常にもホームルームは始まったいた。

丁度出席をとっていた担任は、ある生徒の名簿に『欠席』という文字を書く。『ある生徒』とは勿論黒崎一護の事である。

教室には三〇人程の生徒で満室になっていた。黒板に文字を書こうとして、背伸びをしている一三〇センチ程の高校教師ーーー月読小萌が居た。それを見て、青い髪の少年は『ロリもええわー』と、少々不気味な事を言っていたが、誰も気にしていない。『気にしていない』というよりは、彼が日常茶飯事にこんな事を言っている為か、最早誰も何も思わないと言った方が正しい。

いつの間にか黒板に文字を書き終えていた。黒板には『夏休み補習候補生』と書かれていた。ロリ教師はこんな事を口にする。

「いいですかー。もうすぐ夏休みですが、補習を受けないといけない生徒が数名いるのですよー」

そんな事をニコニコスマイル全快で、さらっと告げる月読先生。

『えー』

当然、生徒達の不満は爆発する。まだ誰が受けるのか決まっていないのに。

「では発表します。まず一人目でーす」

生徒の大半が固唾を飲んだ。

「上条（かみじょう）ちゃんでーす」

無慈悲な声が上条という生徒の耳に振動を与えた。

「じょ、冗談ですよね！？先生！！」

「冗談ではないのですよ。上条ちゃんは『開発』の単位が足りないので、この夏休みの間にしっかり挽回してもらうのですよー」

『ギャァァァァァァァァァァァァァァ！！不幸だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！』という絶叫が、上条という少年が在籍しているクラスに響き渡った。

ちなみに、後の補習代表者は土御門元春（つちみかどもとはる）、青髪ピアスーーーもとい、ロリコン野郎と他数名によって構成された。

ーーー

「ーーーあぁ！？何か今当麻（とうま）の声が聞こえたような……。気のせいだろ！！」

現時刻は九時〇〇分。

朝のホームルームは終わり、一時間目が始まる時間である。
未だに鬼ごっこを続けている一護と美琴。
多分一時間くらい走り続けたはずだ。
もう学生の姿は一人も見えないのに、二人だけが居た。
いい加減体力にも限界がきている一護は、急に立ち止まった。勿論、勢い良く追いかけていた美琴は急ブレーキをかけるが間に合わず、一護に思い切りぶつかった。

「いっつ……。ちょっと急に止まらないでよ」

「お前、学校の登校時間は？」

「え？……あぁ！？もう過ぎてる！？」

今頃気付いたのか、と一護は心の中で思った。

「で、どうする気だ？」

「どうするって言われても……。今から言ったらどんな目に合うか……。っ！？」

急にビクビクと小刻みに震え始める御坂美琴さん。

一体どんな罰が待っているんだか。

「ええい！これもあんたのせいよ！！責任取んなさい！！」

「はぁ！？」

すっとんきょうな声をあげてしまった黒崎一護さん。

「何で俺のせいになるんだよ！？」

「うるさい！！あんたとあんなところで出会わなかったら今頃私は学校にいたのよ！！」

「嘘つけ！！お前『やっと見つけた』とか言ってたじゃ無ぇか！！」

「う」

それを言われると弱い美琴さん。

「た、確かに言ったけど……」

「言ったけど？」

「あぁもう！！私が悪いわよ！！これで良いんでしょ！？」

「何で逆ギレしてんだよ！？」

ーーー

九時一八分。

やっと鬼ごっこから解放された黒崎一護は財布から小銭を取り出し、自販機に入れ、缶ジュースを二本買う。

一本は自分のもの。

もう一本は美琴のもの。

美琴が座っているベンチに戻り、一護は適当に美琴の所に缶ジュースを投げる。

「ほら」

「ん、ありがと」

それを片手で受け止める美琴さん。

続いて軽く音が公園に響いた。

流石にこんな時間帯じゃ歩いている学生は一人も居ない。
美琴はジュースを一口口に含む。
それを見て一護も飲む。

「これからどうするの？」

と、美琴は一護に聞いてきた。
『これからどうするの？』と言われてもこんな時間帯じゃ開いてる店はあっても、学生である一護達は入れない。
しかし、何故美琴はこれから遊ぶのを想定して話し掛けているのだろうか？と一護は思った。

「いや、俺今から学校に行くから」

「何でよ？」

「……そんな目で見られてもな……。つーかお前も学校に行けよ」

「嫌よ。今から行っても拷問が待ってるだけだもん」

「どんな学校だよ」

そう言った直後だった。
目の前からいかにも『不良』のようなグループが一護達の前からやって来た。夏だというのに少年達はブーツを履き、長袖を着ていた。
それを見た一護は『うわ、ありえねぇ』
と心の中で呟いた。

「おいおいこんな所に学校をサボった生徒が二人で何してんだよ？」

「お、しかもお相手は常磐台のお嬢様じゃねぇか」

そしてやはり訳の分からん不良は一護達に絡んできた。
何故だ、何故こうなる？と黒崎一護は本日何度目か分からない言葉をまた心の中で呟いた。
相手は三人居る。
多分全員無能力者《レベル０》だろう。

「どうする？」

「さぁ？適当に焼いといたら良いんじゃない？」

「『焼く』ってお前なぁ……」

適当に会話する二人。
それを見てイラついたのか、不良グループの一人が声を上げる。

「おいおい随分余裕じゃねぇか。クソガキ共……」

その言葉に一護は反応してしまう。

「あぁ？」

黒崎一護は短気である。
それは幼い頃からよく喧嘩を売られていた為だ。喧嘩を売られる原因はオレンジ色の髪。一護いわく、『こういう髪の色してると、いろいろ面倒な事が起こる』らしい。
確かに今までいろんな喧嘩に巻き込まれてきた。

その殆どが相手から喧嘩を売られたものだ。
今こうして喧嘩を売られるのも、今から始まる一方的な暴力も、全てが一護にとってどうでもいい事だ。

本当に、どうでもいい事だ……。

一護はベンチから立ち上がる。
それを見た美琴は、

「……あんたさぁ、」

口を開いた。

「今からでも一護に“謝っといた”方がいいわよ？」

それを聞いた不良グループは、

『……プッ……ギャハハハハハハハハハハハハハハハハハハハ！！』

盛大に笑いだした。
美琴はため息を吐く。
一応忠告はした。
だからこれ以上は何も言わないし、言う意味も無い。
さて、この不良グループはどうなる事やら……。

#1―Railgun&Strawberry（後書き）

railgunってこれであってるのかな？

railgun&strawberry

御坂美琴と黒崎一護

#2 Starter

九時二三分。

学園都市には武装無能力集団（スキルアウト）という無能力者で構成されている組織が存在する。
武装無能力集団（スキルアウト）の構成員のほとんどが能力開発を途中で諦めたいわゆる『落ちこぼれ』である。
だが、学園都市での『落ちこぼれ』と一般的な外の『落ちこぼれ』では意味が大分違ってくる。
外の『落ちこぼれ』という意味は『勉強が出来ない』だの『運動が出来ない』とかこういった類の事を言う筈だ。それに対して学園都市での『落ちこぼれ』という意味は『レベルが低い』、ただそれだけである。
『レベルが低い』だけで強者は弱者を喰らう。
そういった強者から身を護る為に出来たのが武装無能力集団（スキルアウト）である。
武装無能力集団（スキルアウト）が行う事は外にいるギャングと対して変わらない。

ーーー親父狩りならぬ能力者狩り。
ーーーＡＴＭ強奪。
ーーー車強奪。

と、他にも色々あるのだが、取り合えず今はこれだけでいい。
さて、武装無能力集団（スキルアウト）の事にも詳しくなった所で、再び物語を進めようと思う。
そもそも何故武装無能力集団（スキルアウト）の事を説明したのかはと言うと、先程から黒崎一護達は不良に絡まれている。この絡んできている少年達はとある武装無能力集団（スキルアウト）に属している。
恐らく、この少年達は常盤台のお嬢様と一緒に居る一護の事も高位能力者と勘違いしているのだろう。
全く、黒崎一護にとってはいい迷惑である。

面倒臭そうに、一護はベンチから立ち上がる。それを見て、美琴も立ち上がろうとしたが、一護はそれを左手で制した。
数秒間、美琴は一護の左手を眺め、次第にその視線は一護の顔に変わっていく。
そして、口を開く。

「……何よ？」

「俺がやるからお前は帰れ」

「いやよ」

「おい」

「こいつらは『私達』に喧嘩を売ったのよ？『あんた一人』に喧嘩を売ったんじゃないのよ」

正論、と言えば正論である。
この少年達は『一護一人』ではなく『一護と美琴二人』に喧嘩を売った。だが、女に戦わせる程一護は弱く無い。

そして、こうなった美琴はもう止まらない。ただ一つの例外を除けば。

「……後で当麻と戦わせてやる」

その一言は、美琴にとって物凄い魅力的だった。

『あの馬鹿』と戦える。

美琴は数秒間考える。

……。

やがて、結論を出す。

「……分かったわよ。ただし、あんなのに負けない事！良いわね？」

「へいへい」

美琴は再びベンチに座る。

それを確認した一護は、ズボンのポケットから『板』を取り出す。

「悪ィ。待たせたな」

そう一護は素直に謝る。

不良ーーー武装無能力集団（スキルアウト）の三人は笑っている。

「じゃぁ、始めるか」

ーーー

九時二四分

とある高校で勉強中だった上条当麻の体が理解不能の寒気に襲われた。
当麻は目をクワッ！！と見開いて、

「……何か嫌な予感がする……ッ！！」

「こら上条！！急に大声を出すな！！」

ーーー

学園都市

九時二五分。

『板』からは『漆黒の“何か”』が噴き出していた。その『漆黒の“何か”』は徐々に一護の体に的わり付き、漆黒の着物を構築していく

それを見た武装無能力集団達は、「何だあれ？」といったような目で一護を見ていた。同じく、それを見ていた美琴は、「やっぱりわけ分かんない能力ね……」と小さく呟いていた。

やがて、流動する漆黒の着物を着た一護の姿が確認出来た。

黒崎一護の能力は『板』から噴き出す『漆黒の“霊圧”』を操る『力』だった。その『力』は強大過ぎる。一度その『力』を人に放てば、無能力者など一蹴出来る代物だ。『開発』された人間はどんなに能力が低くても『ＡＩＭ拡散力場』という物がある。だが、一護には『ＡＩＭ　拡散力場』が無い。そのかわりに、一護には『霊圧』という物がある。

『霊圧』ーーー。

簡単に言えば、その『力』は『霊なる物の「力」』。

この世ならざる物の力。

その力は異質だった。

学園都市が誇る七人の『超能力者《レベル５》』の一人であり、序列第三位の御坂美琴が見ても理解が出来なかった。

（……“あれ”を“纏う”事で“力”を得ている……？……分かんないわね……。……？）

美琴が考え込んでいる中、一護の流動する着物は右腕に刀を構築していた。

（もう本格的に分かんないわ）

ーーー

九時二七分。

「一瞬で終わらせてやる」

その言葉に武装無能力集団（スキルアウト）は激昂する。メンバーのリーダーらしき男の右の掌からは『炎』が生み出されていた。

（……炎、……発火能力者（パイオキネシス）か）

オウラッ！！という叫び声と共に、リーダーらしき男は右腕を勢い良く振り、『炎』を放つ。

ドンッ！！という轟音が公園に響き渡った。

直撃した、とリーダーらしき男は思った。

勝った。

そう確信した。

だが、

「遅ェ」

『ッ！？』

急に一護が後ろに表れた為、三人は驚く。
武装無能力集団(スキルアウト)が体勢を整える前に、一護は右手を覆っている刀で二人を一蹴する。
勢い良く放たれた刀の『剣圧』によって、二人は遥かかなたに飛んでいってしまった。
残る人間はリーダーただ一人。
だが、一護はある事に疑問を持っていた。
一護の見立てではこの三人は無能力者《レベル０》であり、武装無能力集団(スキルアウト)だった。
武装無能力集団のメンバーの大半が途中で能力開発を諦めたいわゆる『落ちこぼれ』達。
しかし今放たれた『炎』は少なく見積もっても『強能力者《レベル３》』以上の『炎』の威力だった。

（何かがおかしい……？）

そう考えている一護の眼前に新たな『炎』が迫ってきていた。

「ッ！？」

考える事に夢中になりすぎたようだ。
一護は勢い良く刀を振るう。
すると『炎』は発生した『剣圧』によって、四方に散りばめられた。
一護の視界に入ったのはニヤニヤと笑っているリーダーの姿。
随分と余裕そうだった。

轟！！という音が一護の鼓膜を揺らした。
四方に散りばめられた『炎』が一護に向かって飛んできていた。
上空へ飛び、足場に『霊圧』を集中して一時的な足場を構築する。

「あぶねぇなぁ」

「テメェ飛んでんじゃねぇよ！！降りておこい！！」

「馬鹿野郎、これは飛んでんじゃ無ぇよ。立ってんだ」

「よけいわけわかんねぇよ！！」

一護は刀を天高く上げる。
そして告げる。

「お前なら死なねぇだろ……。しっかり見とけよ。そんで忘れるな……」

「あ？」というリーダーの声を無視して、一護は刀に『霊圧』喰らわす。ドンッ！！という轟音を響かせながら、一護の刀には蒼白い『霊圧』が的わりついていた。

「『月牙天衝（げつがてんしょう）』！！」

ズドンッ！！という音を鳴らしながら、蒼白い『霊圧』は刃先から放出された。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーー
とある“原石の死神”
超電磁砲篇
#2―Ｓｔａｒｔｅｒ
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーー

九時三〇分。

武装無能力集団との戦闘に無事勝利した黒崎一護は、残っていたジュースを一気に飲み干す。

さて、これからどうするか。

ここに居れば面倒臭い事に絡まれるのは目に見えている。どこかに移動するしかない。

一護は鞄を取る。

そして、

「面倒臭そうなもんに絡まれる前に逃げとこうぜ。風紀委員（ジャッチメント）に捕まるのは嫌だからな」

「あんたが全部やったんでしょう……」

適当に会話をする二人。
何だかんだ言って結構仲の良い友達のようだ。

「ねぇ、」

美琴は一護に話し掛ける。

「何だよ」

「本当に『あの馬鹿』とやれるんでしょうね？」

「あぁ、やれるやれる」

ーーー

九時三一分。

とある高校。

「やっぱり何か嫌な予感がする！！」

「お前もう廊下に立ってろ！！」

上条当麻は廊下に閉め出された。

ーーー

某県、某市。

九時四二分。

とある路地裏に、燃えるような赤い髪を持つ神父ーーースティル＝マグヌスが居た。神父、と言っては彼を見た者がそう連想するのは至難の技だろう。

派手なシルバーアクセサリーを多く身に付け、香水の匂いを漂わせ、右目の下にはバーコードのようなタトゥーというトンデモ神父は、一枚の紙を虚ろな瞳で眺めていた。

そこには英語で文字が書かれていた。そして、『太字』でこんなものも書かれていた。

『Ｉｎｄｅｘ－Ｌｉｂｒｏｒｕｍ －Ｐｒｏｈｉｂｉｔｏｒｕｍ』

。

『禁書目録』と。

ステイルの瞳は潤んでいた。

そこへ、もう一人別の誰かが着た。

姿を確認するステイル。

腰まで届く黒髪を一つにまとめ、Tシャツの裾をヘソの辺りで強引に結び、ジーパンは左足の付け根から切り離され、健康的な太股が露出していた。それだけならまだよかった。腰には馬鹿長い刀があった。

このエロチックな格好している女性ーーー神裂火織（かんざき かおり）という名のステイルの仲間だった。

その事が分かったステイルは紙を自分の服の懐に仕舞い、神裂に話し掛ける。

「神裂、“あの子”は今どこにいるんだい？」

「学園都市に逃げ込んだそうです。」

「学園都市？よくもまたそんな所に投げ込めたね……」

ステイルは煙草を一本取り、口に加え火を付ける。念の為言っておくが、この身長二メートルものあるトンデモ神父は未成年である。

持ち前の身長で何とか誤魔化しているだけだ。

紫煙が舞う。

ニコチンとタールが満たされていく。
口から煙を吐く。
「学園都市に入るのは“簡単”だが、あんな馬鹿でかい街を歩き回るのは勘弁したいね」
神裂は、ステイルの瞳が潤んでいた事に気付いた。
「ステイル、やっぱり……」
「気にしなくていい。“いつも”の事さ。“いつも”のように『“あの子”を「保護」』してーーー」
そこから先の言葉は聞き取れなかった。
ステイルは吸い終わった煙草の火を靴の底で消し、適当に投げ捨てる。
「……行くか、学園都市に」

ーーー

九時五〇分。

とある高校の一時間目が終わった為、上条当麻は無事教室に帰還する事が出来た。
自分の席に戻った当麻は、大きなため息と共に大量に積まれた『宿題』を嫌々鞄の中に積めていく。

「どうして上条さんだけ……」

「にゃー。それはかみやんの運が悪いからだぜい」

「いやいや、誰でも授業中にあんな大声出したら怒られるて」

いつのまにか当麻の周りには二人の生徒が居た。
『にゃー』やら『だぜい』とか変わった言葉づかいで話すのは土御門元春。
関西弁を話すのは青髪ピアス。

「それはそうとかみやん、これ見てみ」

そう言って、青髪ピアスはとある雑誌のあるページを開いて当麻達に見せた。
そこにはグラビアアイドルの写真があった。
それを見た当麻は、

「これがどうしたんだよ？」

「見てみ！！この胸！！大きすぎるやろ！！」

確かに、このグラビアアイドルの胸は大きかった。一般女性の平均

以上の胸を持っていた。

「うーん」

それを当麻は唸る。

「確かに大きいけどあんまり可愛くないなぁ」

「あぁ、それ俺も思ったぜい」

「この可愛らしさが分からへんやと!?ええいこうなったらくろやん!!……あれ?くろやん今日は休み?」

「今日はクラスにいないから休みじゃないか?」

「くそ!!我が同士がいないやと!?」

荒れる青髪ピアス。

「一護って巨乳好きだったけ?」

「確かショートヘヤーの子が好きと言ってはなかったかにゃー?」

「貴様らうるさい!!」

数分後、彼らは保健室に運ばれた。

#2 Starter（後書き）

starter

始動

#3 Dark Side of Universe（前書き）

ようやく一日が終了。

#3 Dark side of universe

九時二八分。

学園都市、第七学区にあるとあるビルの屋上。

男が居た。
体格の良い、オールバックの男だ。
その男は手摺に体重を預けながら、ある一点に視線を集中してした。
男の視線の遥か先には『漆黒の着物』を着た黒崎一護が武装無能力(スキルアウト)集団を一蹴している所だった。
この男、一体どこまで視力が良いのか……。ここから黒崎一護の居る公園までは、少なく見積もっても一〇〇〇メートル以上はある。
恐らくこの男の能力が原因だろう。視力を上げる能力なのか、はたまた別の方法で視力を上げているのか、そんな事は分からない。
やがて、男は軽いため息を吐く。

「……はぁ……」

男の目には、エメラルド色の淡い『光』があった。恐らくこの『光』が視力を上げているのだろう。
首にかけているネックレスを右手で触りながら、再び口を開いた。

「まさか『未完成』だったとは……。あーあ、これで俺絶対『木原』の野郎に怒られるな……」

そう口にした直後だった。

彼のズボンのポケットに入っている携帯電話が震えた。憎らしい程の良いタイミングで。

彼はズボンのポケットから携帯電話を取り出し、電話をかけてきた相手を確認する。

画面には『木原数多』という名前があった。

「やっぱりかぁ」男は思った。全く、どれだけタイミングが良いのか……。監視カメラで監視さらているのではないか？

まぁ、そんな事はどうでもいい。

男は電話に出なかった。今出てもどうせ罵声しか浴びせてこない。

そんな奴の電話など誰が出るか、と心の中で思った。

約二〇秒ぐらいバイブ音を響かせた携帯電話の振動が消える。またかけてこられらと面倒臭い事になる。そう思い、彼は携帯電話の電源を切ろうとする。

しかし、

「……あの顔面刺青野郎……」

再び電話がなる。

「そんなに出てほしいのかあいつは……、」

しょうがなしに、男は電話に出だ。

『てめぇ、一回目で出ろやこのカス！！』

やはり、と言うべきか。予想通りの言葉が彼の鼓膜に振動を与えた。

「うるせぇなぁ、今黒崎一護の『力』見てんだから邪魔すんじゃねぇよ」

『「力」だぁ？』

「あぁ。……あ、終わった」

いつのまにか終わっていた一護の戦いに男は首を傾げる。

「おかしい。あいつあんなに“弱かった”のか。……『未完成』もいいところじゃねぇか」

『未完成』という言葉に電話越しの男が叫ぶ。

『はぁ！？「未完成」！？てめぇ何が「黒崎一護の真の力を見せてやる」だ！！まだ全然駄目じゃねぇかよ！？』

「あーあー、うるせぇうるせぇ。いきなり叫ぶんじゃねぇよ」

『黙れ！！元々は銀城（ぎんじょう）てめぇが悪いんだろうが！！』

「俺の何が悪いんだよ」

『全てだ。全て悪い』

「一方的だなおい」

『だーーー』

電話を切った。もう面倒臭い。
また電話がかかってくる前に銀城は素早く携帯電話の電源を切る。
そして、公園から居なくなった黒崎一護の事を考えながら、こんな事を口にした。
「……『朽木(くちき)ルキア』と『茜雫(せんな)』を『殺した』……か……、」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーー
とある"原石の死神"
超電磁砲篇
#3—Dark ーside ーof ーuneverse
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーー

一〇時四七分分。

柵川中学。
いつものように、教師が黒板に文字を書いていた。それを下記写す

三〇人程の生徒達。だがその中の一人ーーー佐天涙子（さてん　るいこ）は授業に集中出来ていなかった。少女は文字を書くのをやめ、窓越しに広がっている空を眺めていた。
どこまでも広がる空にゆっくり流れる雲。教師の話など完全に耳に入っていなかった。
だが、そんな事を教師が許す訳も無く、

「佐天」

名前を呼ばれた。だが、等の本人はその事に気づいていない。
教師はもう一度、佐天の名を呼ぶ。

「佐天涙子！！」

「っ！？……は、はい！！」

ようやく気づいた佐天さんは席から勢い良く立ち上がる。

「随分余裕そうじゃないか。さっき俺が説明した『ＡＩＭ　拡散力場』を“分かりやすく”説明しろ」

「は、はい！！」

教科書を持ち、『ＡＩＭ　拡散力場』について詳しく記されているページを探す佐天。しかし、彼女は教科書を逆に持っている。それに気づかない佐天さん。
「えーと、えーと」と言っている間にお馴染みの『キーンコーンカーンコーン』という音が響いた。

「……もういい。次までに『ＡＩＭ　拡散力場』についてのレポー

トを提出しろ」

「え？」

「以上だ」

「……うそーん……」

ーーー

一三時〇二分。

とあるファミレス。

そう言えば今日から短縮だという事を完全に忘れていた黒崎一護は、
何故か御坂美琴と共に、喫茶店で昼食を食べていた。
一護はハンバーグ。
美琴はスパゲッティ。
無言だった。
お互い何も喋らない。

語らない。
だが、そんな沈黙を破った男が居る。
それは、

「よう、一護。お前今日学校サボってたろ？」

上条当麻（かみじょうとうま）という名の少年である。一護と同じ高校に通い、同じクラスの比較的仲の良い友達の一人。
当麻の声が聞こえた一護は振り替える。

「おう、こっちこっち」

「勘弁してくださいよ。上条さんのお財布は今金欠なんですよ？そんな状態の上条さんをファミレスに連れてくるなんて！！一護お前は俺に何がーーー」

「奢ってやるから取り合えず席に座れ」

「はい！！喜んで座らせていただきます！！」

目をキラキラさせて席に座る上条さん。だが、幸せな時間などこの万年不幸少年にある訳が無く、

「本当に来たわね」

「げ！！ビリビリ！！」

「ビリビリ言うな！！」

「店ん中で電気は出すなよ？」

取り合えず注意だけはしておく。
後々面倒に巻き込まれたくない。

「で、何で一護とビリビリは一緒にいるんでせうか？」

最もな質問だろう。
一護は残りのハンバーグを口に放り込みながら、

「朝こいつに追いかけられてな……。気づいたら学校行く時間が過ぎてた。そんでずったとこいつと一緒にいたんだ」

「そういう事よ！！そんなわけで勝負しなさい」

「はぁ！？何でそうなんだよ！？」

「一護があんたを売ったからよ」

「……はい？」

「そういう事だ。悪く思うなよ。安心しろ。飯代はここに置いといてやるから」

「いやぁぁぁぁぁぁぁああああああああ！！不幸だぁぁぁぁぁぁあああああああ！！」

ファミレスに上条当麻の絶叫が響き渡った。
当然、一護達は店から追い出された。
その後の事は、この三人しか知らない。

ーーー

二二時四七分。

暗闇が支配していた。
そこには一切の光も無い。
ゴトン、という音が聞こえた。グラスを置いた音だ。そこには体格の良いオールバックの男が居た。恐らく、あの時の男ーーー銀城空吾（ぎんじょうくうご）という男だろう。
彼はグラスに再び酒を注いでいく。
急にだった。
いきなり電気が付き、部屋の中が明るくなった。
銀城は電気を付けた人物を確認する。

そこに居たのは、

「……何の用だよ。木原」

銀城が酒を口に含みながら言う。
顔の左半分にタトゥーのある男だった。その男は白衣を着ていた。
歪みに歪んだ男。『木原一族』の一人であり、科学者でもある。

「分かんねぇのか、銀城？」
いきなり気配も無く現れた男ーーー木原数多（きはら あまた）。額には青筋を浮かべていた。それを見た銀城は、
「お前何で怒ってんだ？」
「お前今日電話途中で切りやがっただろ？」
そう言えばそんな事もあったな、と銀城は、思った。
「お前以外に小さい男だな。あれくらい水に流せよ」
「……今すぐここでミンチになるか？『原石』？」
「そいつは勘弁してぇな」
「取り合えず一発殴られろ！！」
「断る。まぁお前も飲め、旨いぞ」
「本格的に死にてぇようだな」
ーーー

二三時一〇分。

銀城の部屋は滅茶苦茶だった。どうやら本当に戦ったらしい。
そして、『敵』から『飲み仲間』となった木原はある事を話した。

「お前、こんな話知ってるか？超能力者《レベル５》の一人、御坂美琴の『クローン』と一方通行（アクセラレーター）が殺しあってるって話」

「……知らねぇな」

酒を飲みながら答える銀城。
それを見て、木原はつまみを口にしながら、

「そっから説明かよ……。まぁいい。その一方通行（アクセラレーター）はな唯一絶対能力者《レベル６》になれるらしいんだ。そんでその『クローン』を用意して、二〇〇〇〇万通りの戦闘を行う事でその『落ちこぼれ共』は一方通行（アクセラレーター）が絶対能力者《レベル６》に到達するって言ってんだ」

「二〇〇〇〇万通りねぇ……。随分先の遠い話で」

「だが、もう既に『九九七二人』殺してんだ」

「この計画何年前からやってんだ？」

「さぁな……。少なくとも半年前からだ」

「半年前？一日に何人のクローン殺すんだよ」

いつのまにか無くなった酒をグラスに補充しながら、銀城は言う。

その後も、飲んで少し語った。

『原石』と『黒崎一護』の事を……。

#3 Dark side of universe（後書き）

Dark side of universe

世界の黒の部分

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7436z/

とある“原石の死神”

2011年12月29日14時47分発行